

小田原史談

第113号
発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

中野敬次郎 執筆

後北条氏秘話 (17)

流転の姉・悲劇の妹 (二)

香川 政治 載録

(一)氏康の末女武田勝頼に嫁す

北条氏康の数多き子供達八男六女のうち、第一子が前号に詳述した今川氏真夫人早川殿で、最末の第十四子が武田勝頼夫人となった桂林院であった。

桂林院の誕生は永祿七年(一五六五)であるから、父氏康が五十歳で、関八州の覇権を誇った北条家の全盛期であった。母は婦徳と賢明さで知られた瑞渓院で一腹十二人を生んだといふこの夫人の最後のいとしお姫様で、類葉の繁栄比類なしと言われた幸運の中に誕生したのであった。しかし彼女が八歳ととき

その庄迫は武田氏にいち早く迫っていた。

武田勝頼は信玄の四男で母は父の側室で諏訪頼重の娘の禰津御前である。勝頼は天文十五年(一五四六)の誕生で、初めは諏訪氏を継いで伊那の郡代として信州高遠城にいたが、天正元年(一五七三)の父の歿後武田本家を嗣いだ。しかし彼には父程の智略はなかった。

元龜二年(一五七一)には父と母とが相次いで世を去ってしまった、北条家では長兄氏政が家督をついで、四代の当主となった。また隣接の武田家でも天正元年(一五七二)に武田信玄が歿して四郎勝頼が家督を継いで立ち、駿河に於いては母瑞渓院の兄に当たる今川義元が永祿三年(一五六〇)に桶狭間の戦で敗死して、姉の早川殿の夫君今川氏真が家を継いだので、甲相駿三国に新しい代替りの時代を迎えて、新しい大きい情勢の変化が刻々迫りつつあることを感ずる時であった。西日本に抬頭してきた新しい強大な勢力は、次第に東日本の旧勢力に圧力を加え

軍と決戦をしたが、織田軍の野砲隊と徳川軍の勇戦によって大敗を喫してしまった。長條の合戦で一族、家老、功臣、代被官の勇士一万二千余騎を打ち取られた武田一門は、忽ちにして衰退一路に追いこまれることになったのである。

このような情勢のとき、武田、北条両家の間に取り交されたのが、武田勝頼のために夫人として、北条氏康の娘をもらい受けようという婚約で、桂林院の前途暗たんを思わせる結婚であった。天正五年(一五七七)の春正月の婚儀であったその時、桂林院は十四歳の少女であった。「鎌倉九代記」に

「高坂深く思案して北条家に入手入れつつ、和睦のこととのえ、同五年正月二十二日、北条氏政の妹を甲府に迎え、勝頼の妻室として、一門のよしみを結びたりしにぞ、少しは安緒の思をば致しけり」とあるように、この結婚は甲州側からの手をつくしの懇情に、小田原側が止むなく応じたという形のものであって、かつて、信玄の娘黄梅院が、甲州から小田原に嫁し来た時の状況とは大いに異なっていた。これは武田信玄以来の生き残りの老臣高坂弾正が中

心となって進めた案であった。織田、徳川の新勢力の攻勢がいよいよ強くなってきた、このような際に隣国の北条氏が一度強攻に出てきたならば、武田氏の滅亡は必至の危機である。この際は、北条氏の下風に立つとしても、忍ぶべきであるということ、甲相和議のしるしとして両家の婚姻を成功させて、この一危期を脱し更には北条氏の援助をうけて織田、徳川に対する局面を転換させようという苦肉の策であったのである。それ故、この結婚の事情について「小田原記」には

「甲州より手を入れ旗下になられ、縁者に仰付けられ候様に達して申さるる故天正五年の春、氏政の妹を甲州へ遣はさる」と記してある。彼女の不運な運命は、結婚の日の華々しい祝の中から始まっていたと言っているであろう。

この婚礼の日、高坂弾正が人に向かつて、「私は今夜よりよく寝ることが出来るぞ」と話したという、有名な伝えがある。勝頼は時に三十二歳であった。

永祿八年(一五六五)十一月十三日に織田信長の養女で、実は美濃苗木城主遠山勘太郎友膳と結婚している。しかしこの婦人は永祿十年に勝頼の長男信勝を生んで、産後の立肥ちが悪くて病死してしまった。その後桂林院との結婚までは十年もあるのに、その間に他の女性を愛したとみえ、信勝の他にまだ二男二女を持っている。

桂林院は子を生まなかった。勝頼と夫人との夫婦生活は、僅か五年間という短い歳月で、しかも婚家武田氏は一路滅亡への坂道を落ち続けるだけの歳月であった。

そんな斜陽の武田家に、僅か十四歳の桂林院は、十八歳も年上の、そして自分と三つ下の嫡男さえある男の後室として嫁いでいった短い結婚生活の後に、夫と死をともした桂林院の生涯の、そのひたむきな姿勢は、ひとしお哀れで、いじらしさに堪えない。

織田信長、徳川家康の連合の大軍がすでに國境に迫ってきたとき、彼女が天目山で夫勝頼に殉じて自刃する僅か一カ月前の天正十年(一五八二)二月十九日、武田氏の氏神である韮崎市にある武田八幡宮に、彼女自筆の必勝の祈願文を奉納

している。

この願文は、現在は葦崎市神山町の武田八幡宮社家の矢崎謙次氏が所蔵している。この原文を見ると、如何にも書道を修練した女性らしい麗筆であるが、悲壮な文辞と、一途に夫君の身と婚家を思う真烈の一字一句には、読んで涙をさそわれないものはない。全文を次に掲げる。

「うやまつて申す。きがんの事。南無きみやうちやうらい八まん大ぼさつ。此国のほんしゆとして竹だの太郎とがらせしより此かた代々まもり給う、ここにふりよのげき、新に出できたつて、国家をなやます、よつて勝頼うんを天、どうにまかせ、命をかるうじて、てきじんむかふ。しかりといへども、しそつをあさるあいだ、そのころまぢまぢたり。なんぞきそよし政そくばくの神りよをむなしくし、あはれ身のふぼをすて、てきへいをおこす。これみずからはをがいするなり。なかんづく、かつ頼るいだい十おんのともがらげき新と心をひとつにしてたちまちに、くつかへさんとするはんみんのなららん仏はうのさまたげならずやそもそもかつよりいかでかあくしんながらんや。思のほのを天にあかりしんいな

ずふかからん。我もここに

して、あひともしかなしむ涙又らんかんたり、しんりよ天めいまことあらば、五ぎやく十ぎやくたるたぐひしよ天かりそめにもかごあらじ、此時にいたつて、神くわんわたくしなく、かつがうきもにめいず、かなしきかな。しんりよまことあらば、うんめい此とときにいたることも、ねがわくば、れいしんちからをあはせてかつ事をかつ頼しんにつけしめたまひ、あだをよもにしりぞけん。ひようらんかへむてめいをひらき、じゆめうしやうおん、しそんはんじやうの事。

みぎの大ぐわん、ぢやうしゆならば、かつ頼義ともに、しやだんみかきたて、くわいろうこんりうの事。うやまつて申。天正十ねん三月十九日 みなもとかつより頼うち」 武田家が如何なる運命に立つておらうとも、勝頼が如何なる立場にある人であるらうとも、一旦この人に嫁いだからには、この家を頼み、この人を信じて、自分の運命をともにしようとする意を固めた夫人のけなげな心情が、願文に洩々と伝わっている。

夫勝頼の復興の奇蹟を願う

て祈る夫人の心情が、いかにもいたいたしい。しかもそれが、年わずかに十九歳の佳人であるにおいては更にである。

(三)悲劇の武田滅亡史 人は城、人は石垣、人は堀、なざけは味方、仇は敵なりと喝破して四隣を圧し常に国内に大城の無用を唱えた信玄には、流石十分であつたツツジが崎の館も、勝頼には安居の地ではなかつたと見えて、この国難のさなかに葦崎北方一里の地に新府築城の大工事を初めたのである。工事は天正九年(一五八一)七月に始まり、同年十二月二十四日、落成を待って、盛大な引き移りが行われた。 ツツジが崎から新府まで道程凡そ五里(二十キロ)引き移りの車馬陸続としてあとをたたぬ中に、勝頼夫人が金覆輪の輿に召して、多数の上臈たちにかしづかれた行列の美しさは人目をそばだたせた。 しかし、それより僅か三ヶ月後に武田氏滅亡の日が来て、勝頼も夫人桂林院も生命を失うことになるとは誰が予想できたことであらうか。 年は明けて天正十年の春が来た。 この時、信玄の女婿木曾

義昌が勝頼の不慈をうらん

で反旗をひるがえし、織田信長と通じて甲州入りの手引きをすることになった。待ちかまえていた織田信長は甲州征伐の令を発し、自軍と友軍の部署を定めて、一せいに甲斐の国の周辺から甲府へと征伐軍がなだれ込んだ。

信長自らは伊那郡より、子息信忠は木曾口より、友軍徳川家康は駿河口より、そして悲しくも勝頼夫人の兄北条氏政までが、織田、徳川の友軍となり武駿口から甲州へ進撃したのである。 勝頼夫人が武田八幡宮に戦捷祈願文を奉納したのは、実にかかる情勢のさなかであつて、二月十九日のことであつた。 敵方総勢十八万八千人の大軍の攻撃の前には、武田氏は正面対戦など今は思いもよらぬことである。殊に勝頼の力とたのむ高遠城の落城の報に新府は狼狽の極に達し、軍議の結果、老臣の長坂長閑と小山田信茂との都留郡岩殿城への退去の勧告に従つて、小山田を彼の居城に先行させ、自らは新府城を焼いて岩殿城さして退去することになった。 小山田信茂はこの時すでに叛心を持っていたが、勝頼の不明はこれを察知することができず、一も二もな

くこの言に応じたのである

武田氏滅亡の悲劇の最後の舞台の幕はあけられた。時に天正十年で新府退去の日は三月三日、恰も里は桃の節句、野山の鳥はうたい、草花は春を謳歌していた時であつた。

(四)勝頼夫人の大善寺の一夜 武田氏の運命もはやこれまでと、その最後を感じ取つたのか、花も恥らう十九歳の勝頼夫人の可憐なる心は重く暗くうち沈んでいった。 せつかく建てたばかりの新府城に火を放ち、夫人侍婢たち五十余人をあやしき駄馬にのせ、勝頼主従わずか五百余名で、燃えあがる新府城を後にながめながら郡内めざして逃避した。 目ざす行く先は、小山田信茂が迎への用意をして待っている筈の岩殿城であつた。 ツツジが崎の居館から移つて僅か二ヶ月で、あの新府城に移転の時の華やかさにくらぶれば、誠に夢のよう、春のおとずれなど感ずることもできぬ、悲しい旅立ちであつた。 勝頼夫人は涙にくれながら、焼ける新府城を後にし、現ともはえがたき

春の夜の夢

躍が原、泣山の地も涙ながらに打ち過ぎて、なつかしいツツジが崎の館での休息もつかの間で漸やくにして柏尾の里、今の勝沼町の大善寺にたどりついた時には、もう日もとっぷりと暮れてからであつた。そしてその夜は大善寺に宿泊することになった。

大善寺は今を去ること千二百年前の天正天皇の養老二年(七一八)に行基菩薩が開創したと伝える、関東屈指の真言宗の古刹であるそして今もこの寺は勝沼の東の町はずれに偉容を示している、柏尾山の中腹のゆるい街道の坂道を上つたところにある。 本堂は国指定の重文で、本堂内陣に武田信玄寄進の厨子に安置されている薬師如来と、脇立の日光、月光菩薩の三像も本堂とともに重要文化財の指定をうけている。 勝頼夫妻一行が、織田、徳川連合軍の急追の中で、途中この寺に立ち寄つて一泊したのは一つの理由がある。それはこの寺に夫妻が叔母様といつて深く慕つていた理慶尼という女性がいて、この人に訣別するためであつた。 理慶尼は勝頼の祖父武田信虎の弟で、勝沼五郎とい

われ、安芸守を称した武田信友の娘であった。初め雨宮某に嫁したが、後に縁を絶って大善寺に入り、同寺の慶紹阿じや梨に従って得度して理慶尼と称した。また桂樹庵とも号して、大善寺の山内に庵居していたのである。

尼はこの時の武田氏の滅亡を目のあたりにながめてきたので、その見聞の有様を手記に綴り、一冊を高野山に納めて勝頼夫妻の菩提を弔い、一冊を大善寺にとどめて後世に伝えた。大善寺の真筆本は同寺の寺宝として今に保存されていて、「武田勝頼滅亡記」(群書類従)また「理慶尼記」とも称されている秘本であるが、後者の名称が一般に通っている。武田氏最後の模様を伝える史料としては面白いものであるが、史家の中には信用し難いとする向きもあって、或は多少の粉飾と曲解もあるかもしれない。しかし武田氏天目山滅亡のことについては「甲陽軍鑑」とともに、もっとも詳細に伝える貴重な資料である。

特に「理慶尼記」の記事は焦点を勝頼夫人にあてていて、大善寺宿泊から天目山全滅までの夫人の行動、言行、詠歌などを詳述しているのは注意すべきことである。

さて、大善寺に着いた夜は、夫人は薬師堂に参籠して、本尊薬師如来の前に端座して、夜を徹して祈願をこめた。そして西を出て東に行き、宿かしはをとたのむ

と一首 和歌を詠進して行く末を祈ったのであった。「涙も消え去って、美しく澄んだつづら両の眼にろうたけた若いくちびるをきつと結んで、ほの暗い内陣の燭台のかけ、須弥壇下に合掌する鏡麗優美な夫人の姿は、敵のしゅん動する中にあっても、生死を超越した絶対自由者の座として微動だにもしなかつたことであろう」

と史家は言う(「甲斐源氏と武田氏」)。明けて天正十年三月四日早朝、大善寺を立出すると、昨日まで見えた馬も馬丁もみな逃げ去って姿も見えないので、詮方なく侍婢たちははだしで歩いてかけたが、かよわき女山路ゆえ、ゆくゆく足をいためて血を出すものも出た。従う将兵も半ば昨夜中に逃亡して、今は女房衆も入れて僅かに二百人に減っていた。勝頼夫妻、主従の落ち行

く後ろ姿を見送った理慶尼は、手記にこう書きとめていた。「いたわしや女房たち、きのうは馬に乘しささえ、世に憂きことと思われしがきょうはその馬も人も落ち行きければ、徒歩や裸足で歩みける。御台(勝頼夫人)ご覧じて、げに哀れにぞ思召す。お供の人も、なおわずかなれば、御心細くや思召しける。路道にてかくこそ侍りたまひける。ゆくさきも頼みぞすきいとどしく心よわみかやどりきくかな」

やがて駒飼へつき、石見某の家に宿したのである。そして先に迎える用意に立たせた小山田が迎えに来るのを待っていたが、一週間にもなっても音沙汰がないので、使いを出して見ると、笹子峠に信茂が柵を構え、烽火台を設けて勝頼軍を一歩も入れぬと守っている。小山田の謀叛である。

勝頼は今になってこれに気が付き、大いに怒ったが、家臣も大方離散して残るは僅かに四十一名で、謀る方法もなかったのである。今はこれまでと、駒飼から道を左に日川に添って、天目山さして赴いた。(四)春風もまた悲し天目山大菩薩峠に源を発する日

川の急流に沿った天目山への道は険しく、岩をのぼりいばらを踏みわけて登らなければならなかったのである。天目山には当時、棲雲寺という寺があった。この寺は武田氏十九代の甲斐の守護職、安芸守信満が上杉陣秀の乱のとき、鎌倉幕府の軍隊と二年に亘って戦い、遂に敗れて自害した旧跡であった。勝頼は、この武勇の祖先の眠るところで、その霊護によって血路を開こうと考えたのである。

しかし土地不案内の上、土民や浪人の軍、裏切者の小山田軍、また織田信長の先鋒滝川一益の軍などが次々と前路をさえぎり、また後方から肉迫してきた。勝頼はいよいよ事の急を知って夫人に向って「私の運命もすでに尽きてしまった。御身はここより故郷の小田原に落ち延びなされ、氏政殿も今こそわが家とは敵味方なれど御身は実の妹ゆえ悪くはずまじ勝頼討たれたと聞いたならば、尼ともなって。後の世を弔って下され」と言くと、夫人は涙を押

し拭い「これは余りの仰せです。たとえ輿車にのせられて相模に送られようとも私は決して小田原へ帰ろうとは思いません。勝頼殿の妻なれば、何処までも殿のお供を仕ります」と言って従わないので、勝頼もその貞節に感激して暫くは涙にむせんでいた。田野の里の小高い丘にのぼった勝頼たちは、いよいよここで自害することになった。

眼下に見える日川の河原や、鳥井畑の付近では、秋山紀伊守、阿部加賀の守ら少数の者が、山峽の天險を利用して織田軍の先陣の数千と激しく抗戦し主君の立派な最後を念じつつ血戦していた。

この時、勝頼夫人は最後を決心し、武人の妻として本望を遂げたいと涙ながらに夫君勝頼に分かれを告げ緑の黒髪をぶつとぎって従者に托して、「これを小田原に届け、私が世を去ったこと伝えて下さい」と申し付け

黒髪の乱れたる世そはてしなき思いに消ゆり露の玉の緒と一首の辞世をこれに添えた。そして次に、法華経五の巻をとった勝頼夫人は玉の声も朗らかに誦し終って、側にいた土屋惣蔵に介錯を命じた。懐剣をとり出し口にふくんで、その上自ら押し伏して絶命したのである。

「理慶尼記」は土屋が介錯を命ぜられたときの模様を叙して「はじめて見奉るに、御年のころは、はたちの内と見えさせ給ひて、いろいろの装束を召され、容顏美麗の有様は、昔の楊貴妃、衣通姫、吉祥天女と申すともかほどなまめいたる形はましまさじ、いづくへ剣をたてまいらせんと、あきれはてていたりしに、御みずから御守刀を抜かせ給ひて、御口にふくませ給ひてうつむきに伏し給う」と記している。

侍婢たち十数名も次々に自害して、夫人と運命を共にした。この有様を見守っていた勝頼も今はこれまでなりと嫡男信勝とともに夫人の側で父子自刃し果てたのである。勝頼に従っていた同勢の四十余名も一人残らず討死または自刃して、天目山の悲劇は遂に幕を閉じた。

三月十一日巳の刻(午前十一時)すぎであった。勝頼三十七歳、信勝十六歳、勝頼夫人桂林院は花も取らう十九歳であった。新羅三郎義光以来の甲斐源氏の武田氏も、二十八代約五百年で遂に跡を閉じたのである。武田氏はここに全く滅亡した。

勝頼夫人が最後の様子を故郷小田原の北条家に伝えしたのは、夫人の付け人であった。

夫人が天正五年甲州に嫁入りしたとき、北条氏家臣の中から数人の付け人がお供していった。「小田原記」にその人名が見え、早野内匠助、清水又七郎、劍持但馬守の名が記されている

この外に乳母、侍婢など小田原の女房衆が数人或は十数人お供していったものと思われる。これらの付け人や女房衆は、天目山の最後の時まで夫人を守った「小田原記」によると、夫人が自害の直前に三人の付け人を召して、最後の形見を手

え、この有様を小田原に報告するよう命ぜられた。三人は討死して冥土まで御供したいと願ったが聞き入れられず、早野内匠助と清水又八郎は夫人の形見を頂戴して早々その場を退いた。

後方の山の上に登った二人は、勝頼初め武田一族最後の有様を見て、後に夫人の遺骸を敵方から乞い請けて葬礼を行い、小田原へ帰って来た。劍持但馬守は退去の途中から強いて天目山に引きかえし武田方にまじって討死したという。そこで早野内匠助は夫人の遺骨と形見の書状とを首にかけて小田原に参上し、北条氏

政に甲州の有様をつぶさに言上したので、夫人の最後の様子が詳しく小田原に伝えられたのであった。

しかし故郷に帰った遺骨はどこに葬られたのであるか、茫々として歲月流れて四百年、今は知るよしもない。夫人の墓は小田原にはなく、天目山にある。

天童院景徳院は山梨県東山梨郡大和村宇田野というところにある。山門を入ると本堂の側に影殿があり、これが廟所である。中には勝頼と夫人と勝頼長男信勝の三人の位牌が安置され、夫人の位牌には

「北条院殿模安妙相大禅定尼」とある。また三人の木像があって端麗な夫人の姿に對面することが出来る。

三人の墓石は各々立派なもので、中央が勝頼、宝篋印塔で一丈二尺、向かって右が夫人の墓石で五輪塔一丈である。三人の墓石の側には、勝頼や夫人の最後を共にした忠臣、侍婢の供養塔が立ち並んでいる。その中に妙法禅定尼、妙連禅定尼を初め妙華、妙経、妙観妙世などの女性の法名が多数刻されているのは、夫人に殉じた女房衆のもの。この時、夫人とともに自害した女房衆は十六人で、恐らくこの中には小田原から

夫人に待つて行った女性も幾人かはあるのであろう。そぞろ胸のつまる思いがする。

夫人は絶世の美女であったと伝えられるが、それを如実に思わせるものは、紀州高野山持明院が所蔵する「勝頼、夫人、信勝三人画像」で勝頼が夫人を北条氏から迎えた直後に画かせた記念画像といわれている一幅の中に三人の正装の姿が画かれているが、夫人の姿が服装といい、姿態といい、容貌といい、如何にも美しい。

勝頼夫人にはもう一つ桂林院殿大深宗光という院号がある。

なお「理慶尼記」には夫人の和歌が八首収録されていて、それを読んでいると夫人が小田原で育った頃の北条氏の家庭教養の高さが忍ばれる。

小田原北条氏の全盛期を築いた陰の女性

(一)美貌と幸福と多産の女
小田原北条氏第三代氏康が、文武両面にめざましい活躍をして関八州の覇権を掌握し、北条家の全盛期を築いた人物であることは周知のことであるが、その夫人瑞溪院がまた優れた女性

であった。夫人の出身は駿河田府中(静岡県静岡市)で、父は駿河の国主今川氏親、母は氏親の正室で、京都の公卿中御門大納言宣胤の息女であった。

夫人の父氏親は、氏康の祖父北条早雲の妹で、今川義忠夫人の北川殿を母として生まれているから、氏康と夫人とは元来血縁、浅からぬ「又いとこ」同志である。

さて、この夫人瑞溪院が小田原に嫁してきた年は、いったいいつなのか、実のところははっきりしない。そこで種々の記録から推定せざるを得ないわけだが、まず彼女の生んだ子のうちで生まれて年のはっきりわかっているのは北条第四代当主氏政で天文七年生まれであるとされる。然しこの氏政にはのち今川氏真の夫人になった早川殿と、早世した天用院という同腹の姪と兄が一人づつあるのでこの三人をもうけたと仮定して

も、天文四年(一五二五)以後の結婚でないことが考えられる。もう一つの理由として天文五年に永い間の北条、今川の濃い和親関係が破綻している事実からみても、それ以前の結婚と想像するのが適当であらう。今川、北条間の同盟が破れ

た原因はこの年瑞溪院の実兄にあたる今川氏輝が病没して、その弟達が家督を争ったことに端を発する。結局末弟義元が勝って家を継ぎ、義元は武田信虎(信玄の父)の娘と結婚して以後北条氏とは敵対する武田氏と結んだためであった。これらの理由から、氏康と瑞溪院の結婚を私は天文四年(一五二五)であっただろうと推定している。そうだとすると、この年氏康は二十一歳、夫人は十四、五歳であった。

さて氏康夫人瑞溪院は非常な美人であったという言い伝えがある。それは恐らく事実であったらう。元來今川家は美男系統で、彼女の実兄今川氏輝も、実弟今川義元も美男とされておりまた彼女の母が京都の公卿大納言家の息女であることから考えても、娘の瑞溪院は京女風の美女であったのだらう。

更に夫人の生んだ末娘で武田勝頼の正室となり、勝頼とともに天目山で悲劇の最後をとげた桂林院が、絶世の美女であったことは有名であり(前項参照)、また第七子氏秀が非常な美男子で、その美貌は関東の婦女を悩殺し、彼にあこがれた女性達が流行歌にして、氏秀への思いを詠ったとい

うことが古書に伝えられているから、彼及び彼女の母たる瑞溪院は当然優れた美貌の人であったという傍証になるであらうか。

氏康夫妻の結婚の年を天文四年とするとその偕老同穴の契りは三十七年間になるが、この間夫人は氏康の愛情を一身にうけつけて、しかも関八州の覇王の大奥様として、まことに幸運な生涯を送ったのである。

氏康ほどの男ゆえ、瑞溪院以外にかりそめの情を加えた女性の一人や二人あつたであらうと思うのだが、側室とか愛妾とかいう確たるものは記録上一切伝わっていない。これは氏康の愛情が夫人瑞溪院に対して終始変わらなかつたことを裏書きするものと言つてよいだらう。

そのような夫君の溢るる愛情の結晶であらうか、彼女は次から次へと子供を生み続けた。美貌の上にもまた極めて多産の女性であった

(二)一腹十二人の出産
瑞溪院の生んだ子供は十二人である。彼女の生家の駿河今川氏のことを記した「今川記」に

「氏親(瑞溪院の父)の息男あまたあり、男三人、その他に女三人あり。一人は小田原の北条左京大夫氏康の御前にて、此の腹に男

女十二人を生む」と記してあって、彼女の多産は当時の大名家として珍らしいことであるので特記したのであろう。

十二人とは、男子は後の北条四代氏政を初め七人で女子が五人、何れもその経歴が明らかである。だが氏康には正式に側室の座は与えなかったにしろ、何人かのお手付きの女性がいたことは間違いない。例えば「鎌倉九代記」には、はつきりと男子七人で女子六人であると記してあり、そのほか過去帳などによる実際の調査では男子八人、女子七人で十五人あったことが確認されている。それ故十二人は事実瑞溪院の生んだところに違いないが、他の三人については、何人の腹から誕生したものであるか一切不明である。氏康といえども、結婚の二十一歳以前に女性を知らなかった訳でもなからうし、その後、かりそめに情をかけた女性が全然ない訳でもなかったろう。

それとはそれとして、瑞溪院は母としても立派な婦人であった。多数の子女の育成のために、その家庭教育には自ら特別に力を注ぎ、各々その才能に応じて薫陶したので、皆成人してひとかどの人物となり、男は武将として、また一芸の達人たる技をそなえていたし、女子はいずれも婦徳高く成人した。

四代太守となった嫡男氏政は、豊臣秀吉によって北条家の滅亡をもたらしたの、後世の記録は多く愚将として酷評しているが、今に残した多くの自筆文書は極めて達筆であり、漢詩をよくし和歌をよくし、禅道の修業を積んだひとかどの人物であったことがしのばれる。落城して自刃した時の最後の有様も立派だし、沈着して辞世の喝言と和歌を残し、弟の氏照と相向かい「いざお供仕らん」と言って差し違えたところなど堂々たる死際であった。

兄とともに自刃した氏照は猛将として知られていたし、そのうえ芸達者で笛の名手、愛笛の「大黒」は有名だった。また氏照の父母に対する孝養は有名で「関八州古戦録」に「氏照多くの兄弟の中にて殊更父母に孝順の人なりと、其の頃世以て風説せしとぞ」と記している。

三男氏邦は、書道の名手で聞こえた、早雲寺にある書状などは、筆路の暢達なること一門の人々の群を抜いている。

四男氏規は軍略家知られ、天正十八年(一五九〇)の大関小田原攻のときの、またその美男振りには関東の婦女子の憧憬的であった。

五男氏忠は馬術の名人であり、六男氏堯は鉄砲の名手で、「一町の間目当をはずさず」と古書に評せられている。七男氏秀は武田信玄の養子となり、後また上杉謙信の養子とされるなど若くして薄命流転の生涯を送ったが、資質極めて賢明

で、またその美男振りには関東の婦女子の憧憬的であった。女子もみな大家、名家の夫人となつて婦徳を全うしたが、中でも、今川氏真の夫人となつた長女の早川殿、武田勝頼夫人となつた末娘の桂林院はよく知られる、ともに今川、武田の滅亡期の当主の夫人という悲運を背負ったが、早川殿は、駿府城を追われて領土を失った夫君氏真をリードしつつ駿府城から掛川へ、掛川城から戸倉城へ、そして小田原城へ、更に浜松城へ、京都へ、江戸へと、武田、徳川、織田に追われ追われて流転を続けながら、身を全うして、最後に江戸で大往生を遂げたあたりは、戦国時代の婦人としては稀に見るものであった。

閉会後引き続き福田以久生先生の(女流歌人相撲とその夫について)と題し四時迄貴重な講話を拝聴致しました。

総会は相沢栄一氏議長のもとに五七年度事業報告、決算報告、五八年度事業計画予算の承認を得ました。

◎事業報告
理事会毎月一回
会報年五回(紙数十枚)
講演会三回
四月十一日総会後講演
講師 小田原文化財保護委員 露木 保先生
演題 箱根物産歴史と技術
七月二日 講演会
講師 中国医学研究の大家 医学博士 間中喜雄先生
演題 中国の道教思想と不老長生術の話
十二月十日 講演会
講師 増田武夫先生
演題 源実朝の首の行方
◎史跡めぐり 六回
四月二十三・四日

昭和五十八年度 定期総会の報告

桜花爛漫の四月十七日(日曜日)午後一時より郷土文化館に於て昭和五十八年度定期総会を行いました。

小田原史談会57年度収支決算書及び58年度予算
昭和57年度決算 昭和58年度予算

(収入の部)		(収入の部)	
繰越金	403,689円	繰越金	427,624円
会費	1,177,500	会費	1,075,000
(471×2,500)		(430×2,500)	
市から補助	24,000	市から補助	24,000
預金利子	9,137	預金利子	5,000
雑収入	14,400	雑収入	5,000
特別会計より	100,000		
計	1,728,726	計	1,536,624
(支出の部)		(支出の部)	
通信費	349,420	通信費	350,000
会報印刷代	342,000	会報印刷代	350,000
特別原稿料	0	名簿作製費	135,000
講師謝礼	65,000	講師謝礼	80,000
交際費	44,000	交際費	30,000
事務用品費	31,222	事務用品費	30,000
編集手当	40,000	編集手当	40,000
事務手当	360,000	事務手当	350,000
会費	65,460	会費	70,000
特別事業費	0	雑費	20,000
雑費	4,000		
計	1,301,102	予備費	71,624
残金	427,624円	計	1,536,624円

特別会計(史跡めぐり収支報告書)

S 57. 6. 23~24 信州方面41名参加 8. 22 甲州方面80名参加
 10. 27~28 浜名湖方面46名参加 11. 7 早雲寺50名参加
 S 58. 2. 6 静岡方面46名参加 3. 7~9 伊賀上野方面46名参加

前年度よりの繰越金 250,270円
 今年度収支合計 4,085,559-3,975,500=(残)110,059円
 (繰越金 250,270円)+(今年度残金 110,059円)計 360,329円
 は次年度にくりこします。 以上報告致します。

第二回信州方面史跡めぐり

八月二十二日

甲州方面名勝名邸古寺社めぐり(忍野八景他)

十月二十七日・八日

浜松浜名湖周辺史跡探訪

十一月七日

北条早雲生誕記念史跡めぐり、早雲寺什宝展見学と湯本史跡探訪の会

二月六日

新年初詣(久能山日本平方)

三月七・八・九日

伊賀上野大和方面史跡名勝

探訪会

此の外二月二十一日

文連他市訪問(武蔵野方面)

五十七年度決算書及

五十八年度予算書

以上で本年総会は無事終了致しましたが五十八年度の行事として名簿の作成を予定致しましたので会費の納入は八月末日までに完了出来ませう様に又住所氏名電話番号郵便番号等くわしく御通知下さいませ御願ひ致します。

浜松・浜名湖周辺

史跡めぐり

香川 政治

秋半ばの天高く馬肥ゆる行楽時、しかも、折から小田原文化団体連絡協議会並に小田原市社会教育委員会主催にて十月二日より十一月二十八日までの長期間に亘り文化祭開催中でもありこれが一環として今年も、わが小田原史談会も農繁期ではあったが、文化財の遺産豊富に存在している浜名湖周辺の史跡めぐりを企画したところ同好の士多数参加業事に協力を得たので十月二十七・八の両日一泊二日参加人員四十九名バス一

台にて史跡探訪見学の旅を備し、幸にも両日とも天候に恵まれ、かつまた、訪れた寺々特に本興寺(湖西市)龍潭寺(引佐町)、方広寺(引佐町奥山)の壮麗な大伽藍、庭園は本興寺、龍潭寺、摩訶那寺(三ヶ日町)大福寺(三ヶ日町)の作庭の美事さ豪華さに一同驚嘆の目を見はるばかり、稔りの秋にふさわしい史跡探訪の旅ではなかったかと感銘深く意義ある二日間の史跡めぐりの行事、本年(五十七年)最後に有終の美

を飾ることが出来、これ偏に会員諸賢の絶大なる御理解と御協力の賜と深謝すると同時に諸事情にて不参加の方達が又の機会に遠州路を訪れられた折参考資料ともなれば幸甚と見学地を中野会長先生記述のプリント及びその他縁起書等により記してみよう。

第一日目(二十七日)
小田原駅前出発―大井松田IC―東名高速道―浜松IC―浜松城―西来院―弁天島(浜名ドライブイン中食)―新居関所跡―本興寺―弁天島(遊船家別館)宿泊第二日目(二十八日)
弁天島(旅館午前八時出発)―浜名大橋―館山寺道路―引佐町―龍潭寺―井伊谷宮―方広寺―中食(奥山園)―三ヶ日町―大福寺―摩訶那寺―三ヶ日IC―東名高速道―大井松田―小田原駅前(解散)
見学地
(一)浜松城
徳川家康がこの地に移る時まで、浜松の地は引馬(曳馬)と呼ばれて、そこにあった城を曳馬城と呼ばれていた。万葉集のなかにも「引馬野にはほふ藤原入り乱り衣にははせ旅のしるしにと云う有名な歌(長忌す興磨)があるが、引馬野と

は浜松附近の昔の野原である。家康が浜松と改名したものと云われる。元今川義元の家臣飯尾豊前守が城主であったが、今川義元桶狭間の戦場の露と消えた後徳川家康の属城となり、元飯尾氏の曳馬城を含めて元亀元年(一五七〇)に家康が築いた堅城、当時の石垣、天守曲輪、穴倉井戸などが残っている。天守閣は昭和三十三年二層天守が復元された。

家康関東入封以後譜代大名がめぐるしく城主となつた。堀尾吉晴を最初とし維新に致るまで二十二代もあつたと云う。その上に堀尾氏の次は松平氏、更に水野、高力、太田、本莊、大河内、井上、水野と変り最後は水野氏であった。浜松城は「出世城」と云われ、城主の内には幕閣につながる人が多く、自然に幕閣政治家への登竜門の形となつた。天保の改革を断行した水野忠邦も浜松城主であった。

(二)西来院
徳川家康の正室築山御前の墓がある。
築山殿は今川義元の家臣関口刑部の娘で、武田氏に通じて謀反を計ったという疑をうけ閉居させられ岡崎城から浜松城に移される途

中佐鳴湖の東岸磯塚台地の下で家臣が自刃を従彦したのが聞き入れなかったの止むなくこれを殺害し附近にあった西来院に葬つたのが現在の寺である。
本堂横の墓地に悲運の生涯を送つた築山御前の「西光院殿政岩秀貞大姉」の諡名された墓碑が御霊屋の中に静かに眠っている。

(三)新居関所跡(浜名郡新居町)
東海道の関所として箱根関所と並び称された。
新居の関所は、慶長五年(一六〇〇)に徳川家康によって設置されたと言われている。同じ東海道、箱根の関所は十九年後の元和五年(一六一九)に設置されたことと考えあわせると新居の関所が如何に幕府より重要親されてきたかがうかがえる。このことは創設以来百年余の間、他の関所と違って幕府直轄の関所であったこと、四〇数名にのぼる関所役人の数、鉄砲、弓等の関所常備武器等何れも当時最大級の規模でも明らかである。

現在、建物は面番所で安政二年(一八五〇)の大地震により大破し、同年十二月建て替えられた。
新居の関所は今切の関所と言われた。関所の建物は全国で唯一だけ遺つたものであり、この面番所の建物の横に新居関所史料館が建てられ館内に関所関係遺品、関所通行手形、浮世絵版画、旅道具、道中絵図等豊富に展示して、江戸時代の変遷を知ることができる。

(四)本興寺(湖南市鷺津)
本興寺は浜名湖の西南岸にあつて、国鉄鷺津駅から西方へ徒歩約十分。永徳三年(一三八三)日乘上人が法華宗に改宗したと伝える名利。戦国時代には今川氏を始め地方豪族の帰依をうけ、徳川家康に至り御朱印地を拝領、十万石の格式で優遇せられたと言われる。寺域二万五千坪、国宝の本堂はじめ大小の堂宇樹間に隠顕し、画聖谷文晁の名作水墨、四季山水の襖絵と障壁画(十五面)、小堀遠州作の自然の山を背景に枯山水の風格をも備えた名園などの重要文化財のほか絢爛たる古典文化の香り高い国宝美術品を数多く蔵した有名な名利である。

◎本堂(重文)
天文二年(一五五二)の修復、和、唐、天竺の三様式を巧に折衷した建築史上貴重な遺構で、杉の木の間に望む古色の茅葺屋根の重厚な安定感と枯淡な風格は、瓦葺では味えない深さがあり、信仰と芸術の融合

した永遠の美しさを溢せている。

◎総門

元、三州吉田城の城門で元禄十一年(一六九八)久世大和守より寄進。

◎奥書院

同じく吉田城のもので、久世大和守の寄進。

◎客殿

寛永十四年(一六三七)建立、外観は本堂と同じである。

◎大書院

文政十年(一八二七)建立、谷文晁の壁画を蔵し、遠州流の名園にのぞんでいる。

西郷御前廟所

本興寺の壁面に「西郷の墓」小さな宝篋印塔がある。

西郷御前は三州西郷(今の蒲郡)の城主鶴殿長忠の妙お愛で曳馬城主飯尾豊前守の妻であったが、豊前守桶狭間の戦にて討死し、後家で当時十八歳であったが徳川家康の側室となり徳川二代將軍秀忠の生母である生来利発でしかも淑やかであつたので家康は特に愛していたようだ。墓に詣でていると、この宝篋印塔がなんとなく淑やかな彼女の姿が現実目目の辺りに彷彿と浮かび出させるような優雅な宝篋印塔である。(尤も筆者は山岡庄八氏の徳川家

康伝を読んだ関係?その印象を一入強く感じられた)

◎庭園(名勝記念物)

江戶時代初期に小堀遠州の作庭池泉観賞式庭園である。本堂の北方に南面して構築されている。築山の麓には東西に長い池を穿ち、山上に守護石風の石を立てその東方瀑布に擬した石組より池に向つて溪谷を造る池の手前は芝庭、裏山の井伊谷宮の樹林を背景に傾斜面を利用して造られた実に美事な庭園である。

(内)井伊谷宮(井伊谷)

祭神は後醍醐天皇第三皇子宗良親王を明治二年(一八六九)新政府によって親王御社創建仰せ出され、御陵墓のある龍潭寺境内を分轄し、彦根藩主であった井伊家によって社殿が造営され、明治五年(一八七二)御鎮座し、官幣中社に列せられた。未だ井伊神社には井伊直政、高頭父子が祭られている。

◎縁結びの大黒天

明治の初期浜松に住む工匠若五郎が三七日の間精進齋して秘密に彫刻された物。

◎七尊大菩薩堂(重文)

応永八年(一四〇一)の建立。間口九十キ、奥行一五二キの柿葺流造りで鎌倉末期の建築様式を伝えた静岡県下最古のすぐれた建物。

◎聚古館

本堂に向つて左手の聚古館は昭和四十年落成、館内所蔵の仏像群の内、中央正面一段高く十一面観音像(

以後井伊家の菩提寺となつた。寛治七年(一〇九三)共保逝去寺中に葬るにおいて以後井伊家の菩提寺となつた。延元三年(一三三八)井伊直政、後醍醐天皇第三皇子宗良親王を迎えて井伊城に立て籠るも武運なく北朝方に打ち破られ落城、その後回天の利なく親王は元中二年(一三八五)七四歳にて御逝去、龍潭寺に葬り奉る。法名を「冷湛寺殿」と号すにより寺号を冷湛寺と改めた。永正四年(一五〇六)井伊直氏禪宗に帰依篤く黙宗瑞淵大和尚を開山に仰ぐ。黙宗瑞淵は遠州妙心寺派の法源となる。永禄三年(一五六〇)井伊直盛、今川義元に従ひ桶狭間に戦死、法名を龍潭寺殿天運道鑑大居士と号すその法名にちなみ寺号を龍潭寺と改められた。この戦火により建物は焼失、その後天正十四年(一五八六)秀吉、家康により再建され寺領を家康より九十六石七斗を寄せられた。鎌倉時代に我が国に輸入された宗版錦繡萬花谷(きんしゅうばんかこく)三冊(県指定文化財)そのほか龍の彫刻、井伊家歴代の遺品等数々の寺宝が保考されている。井伊谷は彦根藩主井伊家発祥の地で南北朝時代宗良親王を推戴して南朝挽回の

ため五十年間もの活躍の地である。

(外)方広寺(引佐町奥山)

この寺は禅宗の中臨済宗方広寺派の大本山で詳しくは深奥山方広万寿禅寺という。開山は御醍醐天皇第四皇子満良親王(宗良親王の弟宮)で出家得度の後「無文元運禪師」と申され、今から六百余年前、建徳二年(一一三七一)奥山の領主奥山六郎次郎朝藤は禪師の高徳に深く帰依してこの地に寺を建立して禪師をお迎えして日常薪水の一助として山林六〇を寄進した。寺名は禪師が中国の名刹を巡拝された時一番印象に残っているのが天台山の方広寺であることから、この地形が中国の天台山によく似ているところから深奥山方広万寿禅寺と名付けられたのであると伝えられている。広大な地域に六十余棟の殿堂が建ち並び古松、古杉に包まれた大自然の中に禅寺十景が配され参道には五百羅漢が苔むした岩の上に無数に点在し、浮世をはなれた清浄な感じを与えてくれる。

◎縁結びの大黒天

明治の初期浜松に住む工匠若五郎が三七日の間精進齋して秘密に彫刻された物。

◎七尊大菩薩堂(重文)

応永八年(一四〇一)の建立。間口九十キ、奥行一五二キの柿葺流造りで鎌倉末期の建築様式を伝えた静岡県下最古のすぐれた建物。

◎聚古館

本堂に向つて左手の聚古館は昭和四十年落成、館内所蔵の仏像群の内、中央正面一段高く十一面観音像(

この寺は北朝方の寺院として知られている。

◎縁結びの大黒天

明治の初期浜松に住む工匠若五郎が三七日の間精進齋して秘密に彫刻された物。

◎七尊大菩薩堂(重文)

応永八年(一四〇一)の建立。間口九十キ、奥行一五二キの柿葺流造りで鎌倉末期の建築様式を伝えた静岡県下最古のすぐれた建物。

◎聚古館

本堂に向つて左手の聚古館は昭和四十年落成、館内所蔵の仏像群の内、中央正面一段高く十一面観音像(

この寺は北朝方の寺院として知られている。

◎縁結びの大黒天

明治の初期浜松に住む工匠若五郎が三七日の間精進齋して秘密に彫刻された物。

◎七尊大菩薩堂(重文)

応永八年(一四〇一)の建立。間口九十キ、奥行一五二キの柿葺流造りで鎌倉末期の建築様式を伝えた静岡県下最古のすぐれた建物。

◎聚古館

本堂に向つて左手の聚古館は昭和四十年落成、館内所蔵の仏像群の内、中央正面一段高く十一面観音像(

この寺は北朝方の寺院として知られている。

◎縁結びの大黒天

明治の初期浜松に住む工匠若五郎が三七日の間精進齋して秘密に彫刻された物。

◎七尊大菩薩堂(重文)

応永八年(一四〇一)の建立。間口九十キ、奥行一五二キの柿葺流造りで鎌倉末期の建築様式を伝えた静岡県下最古のすぐれた建物。

◎聚古館

本堂に向つて左手の聚古館は昭和四十年落成、館内所蔵の仏像群の内、中央正面一段高く十一面観音像(

この寺は北朝方の寺院として知られている。

松材、藤原期)、向って右に大日如来像(鎌倉期)、左に聖観音像(鎌倉期)、更にその左に地藏菩薩像(鎌倉期)の五体がある。

藤原、鎌倉期仏像の特色も比較しながら勉強することが出来る。その他の仏像三百余点も収蔵されている

◎金剛装笈(重文、室町期) 高さ七八・八寸幅六〇・六寸、鍍金の薄銅板で桐材にて覆い、大形丸鋸でとめる。文様は修験道関係の諸尊を初め極楽浄土の蓮池や松竹梅など各種のものをとりあわせている。寺伝では源頼光の武将卜部六郎季武が大江山酒吞童子退治の際携行したものという。彼が眼病癒報謝のために当寺に寄進したとある。

◎絹本着色普賢十羅刹女図(重文) 鎌倉時代。高さ約八〇・三寸横四〇・三寸。象に乗った普賢菩薩(唐服用)を中央にして、前に薬王、勇施の三菩薩、後ろに毘沙門、持国の二体を描き、その左右に十羅刹女(普賢菩薩の眷族)を配して十五体を描く。十羅刹女の服装には唐服と日本服の二通りがあるが、当山のもののは和風で平安時代の官女の服装である。色彩は袴を朱と黒に描き分け、文様も日本風に

しているのが特色である。平安時代の女性が自分の身を羅刹女になぞらえて表現したことは平家納経などにも見られる。円光や蓮弁の線に裁り金を用い、その他は金泥の線である。(藤原信実筆) ◎庭園 客殿の西にあり、座視観賞式廻遊式浄土庭園で、江戸前期の茶人山田宗偏好みの庭園といわれる。広さ約三百平方尺。(内)摩訶那寺(三ヶ日町) 古義真言宗高野山明王院末、聖武天皇の勅願所で天平一八年(七四六)行基菩薩の開創といら。寺は字志一東前方に現在地と三転、現在の建物は寛永三年(一六三二)に建立され、もとは、茅葺き又は柿葺きであったが明治三〇年(一八九七)修理の際現在の瓦葺きとなり本堂は入母屋造りの急勾配の屋根、正面、奥行ともに五間廻縁付き、内外陣を境する吹寄せ格子も壮重な感じ。木割雄大、内陣の折上げ格子天井の格間の花鳥草木の極彩色絵画は関中法橋画の銘がある。南朝方寺院として大福寺と対立した。 本尊は聖観音像秘仏。 ◎千手観音立像(重文) 藤原時代の一本彫り、高さ一八五・七寸。典雅な面

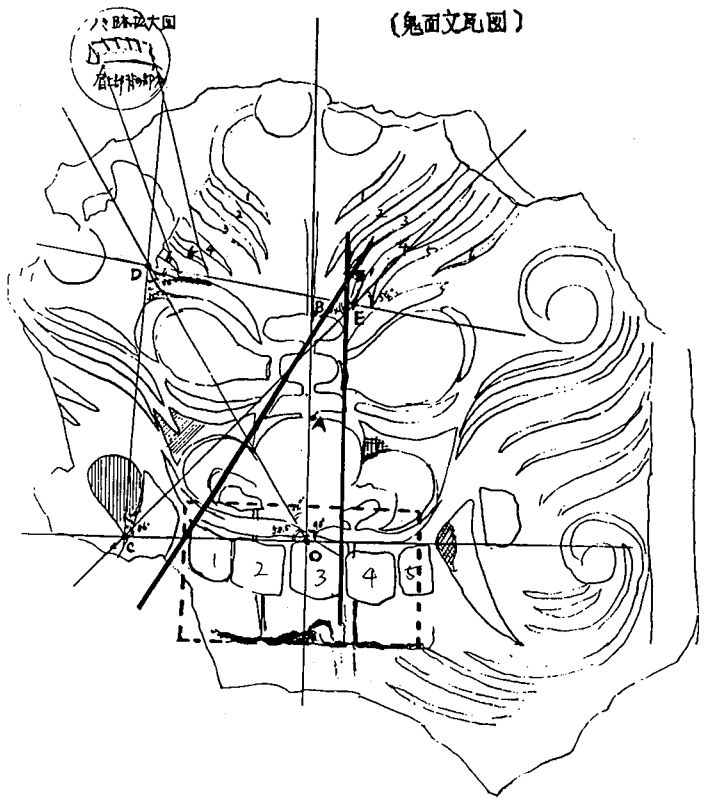
貌、ふくよかな体軀、丸味を帯びた豊かな頬、ひきしまった唇、その下の小さい顎、丸味のある流れるような両肩の線、上肢と下肢にかかる二重綬帯など藤原期の特色を示す。

◎不動明王立像(重文、藤原期か鎌倉期) 高さ九四・七寸、松材 ◎阿弥陀如来坐像(県文、藤原期、松材寄木造、像高八八寸) ◎金剛力士立像二軀 藤原期の作 ◎持国天立像 像高一尺鎌倉初期の作。 ◎愛染明王像 厨子入り毛彫の小軀(室町時代の作) ◎石峰筆花鳥山水 石峰は江戸時代(文化の頃)の画家。二十余点が書院にある。

◎庭園 この庭園は、昭和四二年(一九六七)まで池は泥土で埋没し、築山は雑木や雑草におおわれていたものをたま／＼東名高速道路建設の一技師によって発見された翌四三年八月、日本庭園研究会によって美術調査が行なわれた。その結果平安時代の末期或は鎌倉時代初期に作庭せられた我が国で最も古い池泉観賞式蓬萊庭園であるとのことである。山腹を利用せず平地に築造さ

れた。「建物が西、庭園が東」の座視観賞式の庭園であるが、池の東部に平地がないので、宇治の平等院のような池を越して西方に弥陀浄土をみようとすするいわゆる浄土庭園ではない。また庭園を越して東方に美しい山の景色を見ることができ、決してそれが主で庭園が従ではなく、あくまで庭園が主で、景色は背景にすぎないところを見れば鎌倉時代しば／＼見ることはできない。 借りる借景庭園ではない。

千代台廃寺鬼瓦について (鬼面文図)を落してしまいいん内田盛雄 ましたので一一三号に入れたので合せて見て頂く瓦について出しましたが(一様お願い致します。 早春の大和路 真壁 文子 柳生家の歴史の重み説き給ふ君をめぐりて粉雪の舞ふ雪被く柳生一族の墓所詣づる人等黙し勝ちなる 剣豪を育てし里は寂として茫々たりき雪降りしきる 溪水の碧くよどみて月ヶ瀬の梅の雷ふくらみしるき 昏れ初むる長谷のみ寺の登廊を 辿りてゆけば灯のともりたり こもりくの初瀬の里の朝まだき石段を踏む修業僧あり 濼深く水を湛えて水鳥のはるかに泳ぐ白鳳の城



「建物が西、庭園が東」の座視観賞式の庭園であるが、池の東部に平地がないので、宇治の平等院のような池を越して西方に弥陀浄土をみようとすするいわゆる浄土庭園ではない。また庭園を越して東方に美しい山の景色を見ることができ、決してそれが主で庭園が従ではなく、あくまで庭園が主で、景色は背景にすぎないところを見れば鎌倉時代しば／＼見ることはできない。 借りる借景庭園ではない。

千代台廃寺鬼瓦について (鬼面文図)を落してしまいいん内田盛雄 ましたので一一三号に入れたので合せて見て頂く瓦について出しましたが(一様お願い致します。 早春の大和路 真壁 文子 柳生家の歴史の重み説き給ふ君をめぐりて粉雪の舞ふ雪被く柳生一族の墓所詣づる人等黙し勝ちなる 剣豪を育てし里は寂として茫々たりき雪降りしきる 溪水の碧くよどみて月ヶ瀬の梅の雷ふくらみしるき 昏れ初むる長谷のみ寺の登廊を 辿りてゆけば灯のともりたり こもりくの初瀬の里の朝まだき石段を踏む修業僧あり 濼深く水を湛えて水鳥のはるかに泳ぐ白鳳の城